## 植物と暮らすミャンマー ： 聖なる樹木

The Garden City of the East（東洋の庭園都市）と呼ばれる旧首都ヤンゴンには、英領時代の建物が残り、その敷地や僧院、道路沿いなどには多くの樹木が茂っている。巨木には精霊が宿っていると考えるビルマ人も多く、また特定の種類の樹木は、仏教やヒンドゥ教の伝説や神話に結び付いた聖木でもある。仏教で最も重要な三聖木は、ムユウジュ（*Saraca asoca*）、インドボダイジュ（*Ficus religiosa*）、サラソウジュ（*Shorea robusta*）である。お釈迦様がその下で悟りを開いたとされる「インドボダイジュ」は、イチジクの仲間で、果実が鳥やコウモリに食べられ、種子が糞とともに散布され繁殖する。ヤンゴンでは恐らく沢山のカラスがそこかしこに運んでいるのだろう、路傍や空き地はもちろん、レンガやコンクリート造りの建物の屋根やひさしの上、壁の隙間に根を張ったインドボダイジュの幼樹が見られる。明らかに建物を傷めているのだが、生えるままにされているのは、聖木たるゆえんであろう。街なかの巨大なインドボダイジュには、仏画が祭られた祠が括りつけられ、供物と燈明が絶えることがない。庭園都市ヤンゴンでは、人々の生活の中に樹木が溶け込んでいるようだ。

（2022 年 5 月　大野勝弘）

2014.3.1　ヤンゴン